

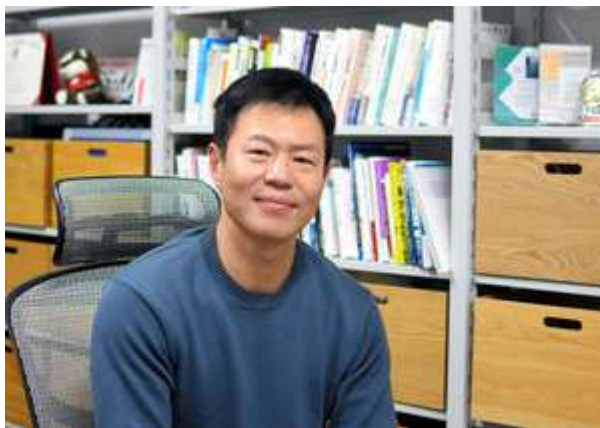
# 高校の偏差値4.5の差 「早生まれの不利」への配慮がない日本

有料記事

聞き手・伊木 緑 2023年6月28日 17時00分

コメントプラス

中小路徹さんのコメント



東京大大学院の山口 慎太郎 教授

3月生まれが入学した高校の偏差値は、同じ学年の4月生まれに比べて4・5低い——。3年前、東京大学大学院の山口 慎太郎教授(労働経済学)らがそんな研究を発表し、話題を呼びました。その後、早生まれ(1~3月生まれ)のハンデを小さくするための議論や新たな施策は生まれたのでしょうか。話を聞きました。

【グラフ】同じ学年でも月齢によって差が出る算数・数学のスコア →

——幼い頃は成長の差が目立っても、小学校高学年にもなれば誕生日は気にならなくなる、と多くの方は感じていたと思います。「早生まれの不利」が意外と長く続く、ということを実感した衝撃的なニュースでした。

埼玉県のある自治体のデータを用い、統計的な誤差を補正した上で4月生まれと3月生まれで入学した高校の偏差値を比べると、4・5も違っていました。

ただ、学力の差そのものは、学年が上がるごとに縮まってはいます。「埼玉県学力・学習状況調査」の4年分のデータを用い、県内の公立小中学校に通う小学4年から中学3年までの延べ100万人超のデータを分析したところ、どの学年、どの教科でも、先に生まれた子どもほど成績が良い傾向が見られましたが、学年が上がるにつれて差は小さくなっていました。

——今回の研究では、学力の差もさることながら、「感情をコントロールする力」や「他人と良い関係を築く力」といった非認知能力の差が、学年が上がっても縮まらないことがポイントでも

ありました。背景をどう分析しましたか。

子どもたちが学校外でどのような活動をしているのかを分析しました。中学3年の早生まれの生徒は、ほかの生徒に比べ、学校外での学習時間、読書時間、塾に通っている率がいずれも高い、という結果が出ました。一方、スポーツや外遊びに費やす時間、学校外の美術や音楽、スポーツ活動に費やす時間は少なくなっていました。

保護者が「早生まれの不利を埋めよう」と、成果の出やすい学力面で意識していたということは、さまざまなデータから明らかです。自分の子どもに何らかの遅れを感じ、そこを補うような形で塾に通わせる。塾が優先され、非認知能力を伸ばすとされるスポーツや芸術系の習い事はしなくなる、ということだと思います。

つまり、早生まれの子どもたちは学力面では努力によって差を縮めていますが、非認知能力の面では、それを伸ばすような活動が不足しているため、差がなかなか埋まらないということです。

非認知能力の中でも「誠実性」と呼ばれ、一つの仕事をきちんとこなし、ものごとの達成を目指そうとする姿勢は、大人になってからの労働収入と強い相関があることが知られています。30～34歳の所得を比較した先行研究によると、早生まれのほうが約4ポイント低いという結果があります。非認知能力を伸ばすような活動の不足が、大人になってからの所得差につながっている可能性があります。

——「早生まれの不利」は昔から多くの人を感じていて、データでも明らかです。今回の研究成果についても話題を呼びました。それでも社会的議論にならないのはなぜなのでしょう。

記事になるたびSNSでも拡散され、「面白い」とは言われるものの消費されるだけで、教育制度のあり方を考えようということにはなりません。これまで手がけてきた研究の中で、最も政策に反映される気配がありません。そもそも、誕生月によって有利/不利があることは自体は知られていること。この研究が発表される以前から議論されていてもいいはずです。

SNSでは、「そういう制度なんだから我慢しろ」「早生まれでも優秀な人、がんばっている人はいる」という声のほか、当事者からは「早生まれに対する差別につながる」「能力が低いと決めつけるな」という意見がありました。しかし、「早生まれだけど、優秀な人はいた」といったエピソードはあくまでも個別事例です。小学校からデータの扱い方を学ぶなど、統計学的事実に基づいて考え、議論するための訓練の機会が必要だと思います。

誕生月に基づいた配慮は、障害者に対する合理的配慮と同じだと思っていますが、当事者は少数派。「自分には関係ない」と思う人の方が多く、結局は保護者や本人が不利をどう克服

するかという方向に終始しがちです。

——諸外国には、「早生まれ」に当たる子どもの入学年を選べる仕組みがある国もあります。日本では議論にもなりません。

入学年を厳密に設定しているのは日本くらいです。個別の事情に応じて弾力的に運用する、というのは日本ではなじみがなく、制度で解決するというのは抵抗が大きいと思われます。「そういう決まりだから」という声もよく聞きますが、その「決まり」がなぜ作られ、何のためにあるのかを考えてほしいですね。「決まりだから」で思考停止になるのはよくありません。

ただ、入学年を選べる制度を設けている国でも、活用するのは、保育料などを余分に払える裕福な家庭に偏る傾向が指摘されています。選択肢はあるに越したことはありませんが、同じ学年内でさらに月齢差が広がる問題点もあり、必ずしもベストともいえません。

——制度を変えなくても、教育現場でできることはありますか。

教員養成課程や教員の研修などで、誕生月による差が大きいという事実が伝わるといいと思います。家庭環境を含め、子どもの発達に与える要因はさまざまにあり、その一つに誕生月による差もあるということを位置づけて、一人ひとりの指導に当たってほしいと思います。差が大きい低学年のうち、誕生月を考慮したクラス編成にすることも方法の一つです。(聞き手・伊木緑)

## □ コメントプラス

[いま注目のコメントを見る](#) >



**中小路徹** (朝日新聞編集委員=スポーツと社会) 2023年6月28日17時50分 投稿

**【視点】**早生まれの不利が大人になっても影響を与えることは、スポーツでもよく知られ始めています。 […続きを読む](#)

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

